

光の子



No. 78 1998. 6. 1.

● 神の召しに応える（ヘブライ人への手紙第5章4節）



「天気になあれ」

え・中島英子

「げんげん」

大利根の子ら風の子ら風光る

大利根の風のひろがるげんげん田

不意に打ち始めてげんげ田を返す

踏んづけて叩いて撫でて蛙を塗る

はみ出して尾を振るおたまじゃくしかな

蛙の子尾のさびしさをひらめかす

田蛙に水一面の明るき夜

落合 水尾（『浮野』主宰）

新しい契約

ルカによる福音書 22. 20

また、この光榮ある任務を、だれも自分で得るのではなく、アロンもそうであったように、神から召されて受けるのです。

理事長 福島 勲

古代エジプト、メソポタミヤ地方、つまりオリエントの人々は、油（オリーブ）に対して特異な感覚を守っていた。

モーセは神から命じられて、兄弟アロンとその子らに油をそそいで聖別し、祭司の職に任じ神に仕えさせた。油を注がれて任についた者は、祭司、預言者、王である。

キリストも神から油を注がれたということである。（使徒言行録・四・二七）

イスラエルでは建国の肇、王や皇帝なる家系も人もいなかった。最初に王と任命されたのはサウルであった。予言者サムエルによって油を注がれている。（サムエル記上・十・一）われわれの注目することは神が聖別されたことに対して、その権威を認め、犯すことのできないものとしての尊厳さの前に、全く謙虚さを保つということである。

サムエル記上・二十四・六・二十四によると、ダビデがサウル王に仕えていたが、名声が高まるにつれ、王によって疎まれ、さては殺されそうになる。負われてエン・ゲディの野に逃げ、家来と共に洞穴に隠れる。追ってきたサウルが用を足しにこの洞穴に立ち入る。

ダビデがサウルを殺そうとすれば

絶好のチャンスだが、ダビデは「主が油を注がれた方に手をかけることは、主は決して許さない」とはやる家来たちを制している。

牧師は神に選ばれ、み言葉を述べる使命を帯びた者である。これに相應しい人格、学識、信仰が必要であろう。しかし完成された人間なるゆえに選ばれ召されるということではない。神の選びは神の思惑の中にあり人間の条件にあるのではない。

ある牧師が教会員の前で妻を殴った。彼はそれで牧師を辞任し、宣教の業から身を引いた。

牧師としてあるまじき行為でありこの牧師のとつた自らの処置は当然のことと思われるだろう。

ところが、先輩牧師がこれを聞いて、彼は細君を殴ったから牧師を辞めたのではなく、辞めたいから殴ったのだ。召命ということと細君を殴るということと、どちらが重大なところか、と評した。

言葉が足りなくて誤解を招いてはいけませんが、この先輩は暴力を肯定したわけではない。召命の重大さを言ったのである。

今日のわれわれ、自分の存在、自分の職業、任務に対してどれだけの使命感、召命意識を持っているだろうか。ルターが職業を天職と言った。

時代が移り、職業の選択の自由勝手な今日、天職思想は古びてしまい、単なる労働者となって、何の権威も確信もなくなってしまう。が果たしてこれでよいのであろうか。

キエルケゴールが言うように、たいていの人は絶対を相対化し、相対を絶対化している。つまり聖なるものを俗化し、世俗のものを聖化してその権威尊厳を見失うと共に逆にまた高揚している。

ここから創造の秩序の混乱が始まるのである。

親は子どもに対し、親の尊厳を失い、教師は生徒に対して自信と責任を欠き、愛の絆が解けて、怒りの鞭があっても、愛の鞭がない。

ひたすら栄達を望み、贈収賄で蓄財を画し、自らの任務の尊厳を失墜さす悪徳を排撃したい。

この栄光ある任務をだれも自分で得るのではなく、アロンがそうであったように、神から召されて受けるのである。（ヘブライ人への手紙・五・四）

完全絶対は神のみである。人は誤り躰く不完全な存在である。過ちを意識すれば、悔い改めるに勇敢であれ、二度とない人生に、召されている確信に立ち使命に込めたい。

学もどきのつづき ③④ 一人でいるとき

山形大学医学部教授

仙道 富 士 郎

とても耐えられないようなことばかり続く。「キレ」たからバタフライナイフで先生を刺してしまうなど、その心理を共感することは私にとつては不可能に近い。しかし、思うに若者たちの行為をただ困惑して眺めているだけで、「親がしっかりして

ないから・」な

どと御託を並べている、私を含めた大人たちに理があるわけでもあるまい。大上段に構えて言えば、共感不可能な行為にまで若者たちを追い込んでいったのは、私を含めた大人たちの仕業ではないのかという思いが募る。過去にとっても暗い時代も多かったのではあるが、その時、若者たちはその暗い時代を

克服しなければならぬという情熱にうなされ、強い意志を持って生きることができた。しかし、今、二〇〇〇年が目の前に見えているとき、若者たちには、反抗してうち砕くべき対象さえ見えてこないのではない

だろうか。全ては、予定通りの会社

に就職し、たとえていえば身分相応の働きをして老いていくといった、ずっと見渡すことの出来る世界にしか彼らは生きられない。特に今の若者たちをかばう気は毛頭ないが、この「出口なし」の状況の中で、いらいだちを覚えるのは、若者として「正常」のように見える。過日、米国の若者たちが、政府のイラク攻撃に異を唱えている姿をテレビで垣間見た。事の善し悪しではなく、新鮮に見えた。自分たちが考えたことを堂々と世に問う姿が若者にはふさわしいと思う。愚妻も同じ反応をし、迎見庸が、朝日新聞の日曜版に米国のこの若者たちをたたえる記事を書いた。彼も、我が国の閉塞状況にいらだっているように見える。普通の感覚から被覆された環境下で育てられ、人の心はさっぱり分らないが、物事の筋道は即座に理解し、その模範解答を出す能力には優れた怪物に成長してしまつたのが、我が国を支えてきた官僚たちなのかも知れない。テリー・伊藤のインタビュに答える大蔵官僚たちは、とても気味が悪く、その感覚をフォロウすることは出来なかつた。偽悪的に言うのではなく、精神の質から見て、パタフライナイフで先生を刺した若者と、本心に違

いがあると言えるのだろうか。

何十年かぶりで難しい本を読んでいる。小生の最近の本選びは、ほとんど朝日新聞の書評欄による。いつ見つけたか分からない「小集団の時代」大衆社会における個人主義の衰退」というフランスの社会学者の書いた本が生協から届き、出かけるとき、もう一冊の本と一緒に旅行鞆に入れた。時差で夜はなかなか寝付かないから、書き物の仕事を終了した後は、英語が全く解らないテレビを放心しながら眺めるか、本を読むしかない。何でこんな持つて回った表現しかできないのかと思われる。難読な表現の間に垣間見えることは、いわゆる社会主義国が崩壊した後に社会の前面に出てきたのが、「民族」「オカルト宗教」などの（小）集団で、これの理解なしには、ポストモダン（現代の後に来る世界）は語れないということらしい。何回読んでも完全には理解しがたいと思われるこの本から、今、世の中が激しく変わりつつあるらしいとだけは感じ取ることが出来た。常に乗り越えられるものではないが、それぞれの時代にはそれぞれの社会規範があり、人々はそれを認めるかあるいは反抗するかによって自分の立場を保ってきたわけだが、その規範が今どうも見え

なくなってしまったということのようである。

少年たちのいらだちを止めるに足る道を見つけることは、私には出来そうにもないが、少年たちと一緒にのたうち回る以外に道は開けてこないだろう。そんなエネルギーがまだ私に残っているのか心許ないが、難しい本は、私を久しぶりに刺激してくれたことは確かであろう。

それにしても一人でいると、すぐに心に浮かんでくることは、何とよこしまなことであり、何とみだらなことであることか。「正義の味方」が、こんなくだらないことばかりに思いをはせていたのでは仕方ないのではないかと自分を叱るが、本を読んだり、原稿を書いたりする時間の隙間に入り込んでくる妄想は、どうしてもよこしまでみだらであり、それを封じ込めることは出来そうにない。



2つの文化に生きる

12

日本キリスト教団東大宮教会
バーガー 京子

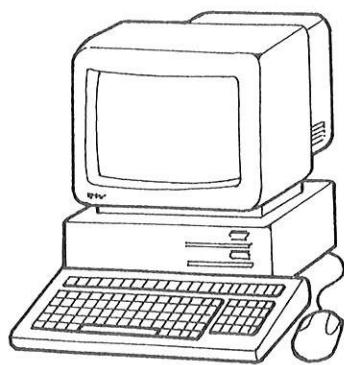
最近、パソコンの前に座ることが多くなった。パソコンといっても、去年の夏の終わりに息子や夫がパソコンの前から離れないのを見て、ひよつとした私にも使いこなせるのでは、と思って使い始めてみた。使い始めはパニック続きで昼間ひとりで使用などと考えられず、夜、必ず、夫か息子がいるときにまず電源を入れて使い始め、パニックになると「ちょっと教えて！」と叫ぶと息子が現れて手取り足取り細かい指導をしていてくれる。その繰り返しだった。それが半年ほどたった今、パソコンなしには仕事が出来ないところまで来てしまった。電子メール、インターネットはまだ使いこなすところまではいつていないが、そのうちフルに

使う時が来るだろうと思っている。

最近した大仕事は夫の大学での一時間ほどの講演の英文和訳である。以前は腕が痛くなるほど鉛筆でローマ字書きをしたものを夫がワープロに打ち直し、原稿を作っていたが、今は直接私がパソコンに向かいながらローマ字に訳して打っていく。夫は日本語は読めなくてもないが講演などの時はローマ字の方が話すスピードですらすらと読めるため、夫のための英文和訳はもっぱら英文からローマ字である。始めの頃は訳す時、ひらがなや漢字が頭の中をちらちらしたが、今は割とすらすらとローマ字が打てるようになった。先日はその講演を印刷物にしたいという依頼を受け、今度はローマ字の日本語をひらがなと漢字の日本語に直すという大作業をして、かなり時間がかかったが、これもパソコンのおかげで以前のように腕が痛くなるようなことはなくなった。

夫は日常会話の日本語は流暢に話せるのだが、公の場で話さなければならぬ時、例えば、大学のキャンパス礼拝の説教や教会での奨励などのすべての奉仕の原稿は私に英文を渡し、私が訳し、最後に二人で見直し、私が訳しきれなかったところを夫が補うという作業をしている。子

どもが小さかった頃はこの仕事は本当に大変で、私も髪を振り乱して必死の思いでしていたものだが、子どもがだいぶ大きくなって時間に少し余裕が出来た今、この大学教授秘書(?)という仕事も悪くないと思っている。それは夫がその時々、何を考えているのか、何を大事にしているのか、原稿を訳す時に伝わってくるからだ。訳しながら「へえ、こんなことを考えていたのか」と発見することもある。先日頼まれた原稿を訳していて、夫がそんなにまで思い悩んでいたのかと改めて気づかされることがあった。それは「アイデンティティ」について原稿だったのだが、全部でA四版一〇枚ほどの原稿の約半分を「名前」について語っていた。日本では外国人の名前はカタカナでなければならぬ。また、ファーストネームを先に書き、イニシャルと名字で済ませる時もある。夫は日本に来た頃、この名前で自分のアイデンティティを失いかけたと言っている。先ず、夫が日本の風習に合わせて、性を先に名前を後にして「バーガー・デービット」と用紙に書く。しかし、返ってくる呼び名や印刷物は、「デービット・バーガー」「D・バーガー」「R・D・バーガー」と様々である。外



国人は別、といった扱いが字に出てしまっている。私もいつか何かの書類に「京子バーガー」と書かれた時は「私は日本人なのでバーガー京子と書いて下さい。」とお願ひしたのを覚えている。「外人」という枠に入られることでその人はこの社会には本当は属さないとレッテルを貼られ、長く住もうとすればするほど、自分のアイデンティティがわからなくなってしまうわけだ。

在日十九年目を迎えて、夫にはも

エッセイ
ねぎの葉味

学校に勤めていると、町で買い物などをしているとき、よく生徒に出会うことがある。人によつては、いろいろなところで生徒や卒業生と出会うのが苦手、という人もいるものだ。私はどうかと言うと、町で出会うが、電車で出会うが全く苦にならない。むしろ、こちらから声をかけたりしている。

或るそば屋では、アルバイトをしているY子さんに出会った。私は家内と一緒に、何とはなしにそのそば屋に入ってみたのだが、入るとすぐに、女の子が注文を取りに来た。と同時に、「あー！先生！」ときた。大きな声であった。夕食時でお客様の多いそば屋の真ん中だったので、大勢の顔が一斉にこちらを向いた。家内などは、まるで身の縮む思いだったと、後で言っていた。紺紺に赤い襟の付いたそば屋のはんてんを着こなして、アルバイトの彼女は、すっかり店員になりきった格好だ。注文を取りながら、私が辞めた後の学校の様子や、美術部のことなどを、くつたなく話してくれたのである。彼女は、にぎやかな美術部の生徒の

中で、いつも冷静な感じであった。そして、おとなしかった。自分の考えが常に正しいと思ひ込む生徒や、自分の主張を通したがる生徒など、さまざまな個性の中で、彼女はいつも、うまくバランスをとっていた。彼女は、近くの会社に就職が決まったという。本当は、もう少し美術の勉強をしたかったのだが。特別にズバ抜けた才能があるわけではない。しかし、もう少し、ほんの少しでも良いから、好きな美術を学びたかった。ところが、突然の母親の病気であった。急にアルバイトをしなければならなかったし、進路も変更して就職する、ということになってしまったという訳である。しかし、彼女の表情に暗さは感じられなかった。やがて彼女は注文したそばを運んできた。「お待ちどうさまでした。」そして、少し小さな声で、「葉味のねぎ、少し余計入れておきましたから。」と言った。

これは彼女の懸命のサービスであった。アルバイトとして働いている彼女には、お客にサービスしようにも、無形のサービス以外には、何の権限もない。したがって、彼女にとって、私へのサービスが、一箸余計に葉味をつけるぐらいしかなかったのだろう。私は、涙が出る程嬉しかった。そば屋の主人が、ドーンとサービスしたのではない。アルバイトのY子さんが、ほんのちよつびりの葉味のねぎをサービスしてくれたのである。それは、何にもまして重いものに、私には思えた。Y子さんの、いつもの優しさ、いつもの心づかいのこまやかさが、言いうもなく、いじらしい。

食べ終わった私は、お礼を言って、そば屋を出てきた。

帰り道、車の中で、私は何とも言えない不安に襲われ始めていた。

あんな優しい、おとなしいY子さんが、これから歩んでいく社会で、どんな生活をするのだろうか。ものすごい競争率第一の競争社会の中で、彼女の本当の良さが認められ、生かされるような環境があるのだろうか。学歴の高い人や、押しの強い人達に、Y子さんは押しつぶされてしまわないだろうか。そう考えると、心配で

たまらなくなってくる。

「大丈夫よ。」と家内は言った。「どんなところでもそういう子は大事にされますよ。良い友だちもできるでしょうし。神さまがきくと見えますよ。」と付け加えた。

神様が見ている。本当にそうなら良いと思う。仕事の辛さは仕方がない。忙しいのもやむを得ない。上司が厳しくたって、それによって一人前の人間になっていくのだ。若いんだからそれらの事には、耐えていかなければならない。しかし、彼女の持っている本当の良さが、まわりから理解されない社会であつたら、それは彼女にとって悲しいことだ。私は心からお願ひしたい。「神様、彼女は心根のやさしい子ですから、どうぞ不幸な目に会わせないで下さい。どんな形でも結構ですから、幸せにして下さい。」



彫刻家 中島 睦雄

光の中で

佐藤家

小さなさくらの蕾が、いつせいに開いてアツという間に散り、今は青葉の季節になりました。

子どもの成長はとも早く、出来ることがつぎつぎに増えていきます。

パンクした自転車のタイヤ・破れたサドルなど、昨年途中からボランテアで来てくれていた五木田さんが直して下さいました。

子どもの家全体の破れたところが次々に修理されキレイになっていくのが楽しみです。

私の父もいろいろなものをよく修繕してくれて、すごいなあとそんなことが尊敬を高めていったように思えます。こんなことが父や兄に代わって男性性を伝える指導員の仕事だと思います。

きちんと修理された自転車で、乗る練習を洋と始めました。なかなかうまく乗れずフラフラしては倒れてしまいます。しかし、倒れないでいる時間や距離がだんだん伸びていく

ようになりました。

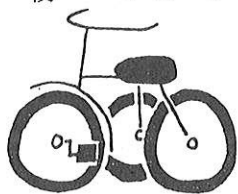
そして、次の日にはとうとう乗って運転が出来るようになったのです。

今では、自転車を乗り回す休みの日や幼稚園から帰ってきてからの小さな子どもたちの姿がにぎやかな園庭です。

子どもって、課題に向かうときの一途な姿、何度も何度も出来るまで繰り返す忍耐力、時間を惜しんで取り組む真面目さ・等々、本当にすごいなあと、私も教えられる思いをしました。

きつこうして生きていく力を身につけていくのでしよう。

神田幸枝



河のほとり

倉沢家

今年の県立高校の合格発表の日。

不合格者には事前に学校から連絡があるはず・・と思っはいても、やはり本人から「受かった。」とい

う連絡があるまでは安心できなかった。

受験した高校は裕の実力ならば100%安心・・というレベルではなく、担任からも、もしもの時のことも考えておいて欲しいと言われるほど危ういものだった。

その上、この一年本当に高校に行つて勉強する気があるのか？あるなら今なすべきことは何か・・という確認をイヤというほどしなければいけないような状態でほとんどを過ごしたのだった。

だから、「倉ちゃん、受かったよ。」と裕から電話があったときには信じられなかったのが本当のところ

です。帰宅した彼に、一通りおめでとうを言ってから、「大変なのはこれからだよ。本当のおめでとうは卒業するときに盛大に祝うから。」と伝え

た。今彼は、「高校って、楽しいよ。」と、危なっかしかったあのころが嘘のように毎日の高校生活をエンジョイしている。

子どもたちの季節

仙道家

全てのものがきらめいているこの時期、新学期を迎え、子どもたちもひとつずつ学年が上がり、環は中学校へ、湊子は高校へ入学しました。

まだ春休みのある日、環の小学校担任を囲んでの懇談会がありました。一方ならぬお世話をお掛けした担任の先生なので、私も出席しました。

その席で、あるお母さんが、「小学五、六年で環ちゃんが一番変わったわね。」とおっしゃって下さいました。

また、他のお母さんは、大変迷惑を被ったというお話をなさっていました。

それらの話をお聞きしながら、環は迷惑もかけたが、多くの方々に目をかけられていたのだな、と思いました。

思います。そして、自信を持って中学生生活を送れるようにと願っています。

新学期直前のある日、仙道家に新しい仲間がやってきました。

小学三年の小さな女の子です。

とても複雑な内面を抱えている様子が見て取れ、一緒にそれに立ち向かい克服するための力のなさを感じています。それでも彼女は元気に学校に通い、ここでの生活を楽しんでいます。

池田 祐子



暮らしの彩り

笹山家

先日二歳の姪に会った。姪は、母や父、決まった公園友だちという限られた小さな世界で平穩に、そして守られて生きているということだ。

こう感じた一方には違う環境があった。それは乳児院や児童養護施設で乳幼児期を過ごしている子どもたちの環境だ。そこでは、私の姪に比べ

て、幼い頃からたくさんの刺激がある。何かをして遊んでいれば他の子どもたちに邪魔され、黙っていても

たくさん大人の声かけられる。『平穩』と呼ぶのを少しはばかられるほどに小さな子どもたちは喜んだ

り、怒ったり、泣いたりためまぐるしく感情を動かす。また人数の多さ故に、自分をアピールしたり防衛したりすることにエネルギーを費やす。そういう最近、どの子だか言っていた。『小さいとき、大きい子に嫌なことをされると、その子の嫌な

ところを見つけて対抗していた』と。そうやって生きてこなければ自分が成り立たなかったのか。年齢相多で感情過多な状況で暮らしていくのは、そういうことなのだろうか。

そして、一方には、日夜そのようなことを考えなくても平穩に過ごしている『普通』のほとんどの子ども

たちがいる。どっちが良いとか悪いとかや、運、不運では表せない何かを思っ切くなった。

でも、どんな環境で育とうとも、誰よりも強く、やさしく、賢く生き抜いていつて欲しいと、日常的に関わりを持つ可愛い子どもたちに、願いをこめながら生活をつくろうと思っ

ている。笹山 恵理

原田家日記

四月の下旬に、入所の話がありました。

原田家の私の担当グループに仲間入りすることが決まり、私は入所前面接に児童相談所に行つて来ました。

これは、入所への不安を抱えている子どもに、この生活や仲間たちの様子などを話し、写真を見せて説明し、一緒に遊べるようになって、入所の際の不安を出来るだけ解消するという、光の子どもの家が始まつて以来続けていることなのです。

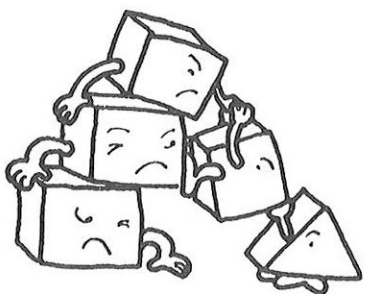
私とお話ししてくれるかなあ、私も不安と緊張でいっぱいでした。

『誰、何この人』と、きつと思っ

たに違いないでしょう。一通り挨拶と自己紹介やこちらの様子などを話しました。思っ通り、女の子は下を向いたまま、何もお話ししてくれませんでした。

『麻理ちゃんのお目が見たいなあ。』などと話しかけてみましたが、ちらり、ちらりとこちらの様子をうかがっていました。

それから、ブレイクルームに移ししばらくすると私の側で、ブロックの家を作り始めました。『この木をここに植えようか。』



木部 すなお

現場から

光の子たちと ⑦

五月四日、光の子どもの家の園庭では、毎年『子どもまつり』が催されます。児童福祉週間について考えようと言う趣旨のもとに・・・

事情があつてここ数年、小規模化されてきました。私自身もかつての盛大だった子どもまつりは、話に聞いていただけで、実際に体験したことはありません。ただ、子どもたちの話す様子から、とてもウキウキした楽しいもの、という印象を受けていました。

今年は、笹山保母と二人、小学生の五人に声をかけてみました。五人の小学生もまた、かつての子どもまつりのことは、ほとんど覚えていませんでした。アルバムをめくりながら、「こんなことをやっていったんだって。何かやってみたい？」というところ、みんな「やる！」と張り切ってくれます。アイデアもたくさん出て、ピラミッド、トンネル、旗、像、絵、気球・ETC。どんどん出てくる名案になかなか話はまとまらなかつたけれど、最終的に、旗とトンネルに決まりました。

一週間チョットしか時間がなかつたので、早速翌日から旗作りです。

みんなの希望で、旗に描く絵は「ポケモン」。五年生の詩美が絵を描いてみんなで色を塗ります。旗作りは、土曜日の午前中と日曜日の午後を使って、半分あきってしまった子どもたちに、ハッパをかけながら、何とか仕上げることができました。

次は、最大の難関トンネル作りです。光の子どもの家一番のアイデアマンの五木田さんの知恵を拝借し、段ボールの型を作ります。土曜日の登校前、お休みの五木田さんは早くからやって来て下さり、段ボールの型を取ってくれています。それを見た子どもたちは、「わー」と目を輝かせています。内心、完成するかどうか不安だった私ですが、その様子を見て、「よし、何とかなるかも知れないぞ！」と思えました。

小学生が学校からもどり、食事の後かたづけをし、いよいよ、本格的なトンネル工事の始まりです。

段ボールを差し込んで、トンネルの骨組みを作ります。みんな、なかなか器用で、さつと形になりました。順調、順調とほくそ笑んでいました。

が、次の補強工事が大変です。段ボールを折り曲げて、骨組みの段ボールの間につけ、うめていくのですが・・・

やり始めてすぐに、思い通りにならずに苛立ち「こんなのボロクセーよ」と言い出す隆、あつちへフラフラ、こつちにフラフラする由花、やる気は一番だけ何をして良いのか困っている一年生の佳美。とても時間と手間のかかる作業なのに、黙々と取り組んでいるのは、信一と詩美だけ。さすが、高学年だ。プープー文句を言う子を叱ったりおだてたり、ほめたりしながら、何とか巻き込み、三時前。一息つこうかと思ひ、「休憩しよう」というと「エー、休憩？ 終わりにしようよ」というので、「嫌な子はいいいよ。やる人だけジュースを飲みに行こう」というと、みんな「行く、行く」と急に腰が軽くなりました。みんなで飲んだジュースは格別においしかった・・・

夕方、補強工事が終わり、本体の出来たトンネルに絵を描くための紙を貼っていて、気がつくとき詩美しかいません。詩美と一緒に何とか仕上げ、次の日へ。

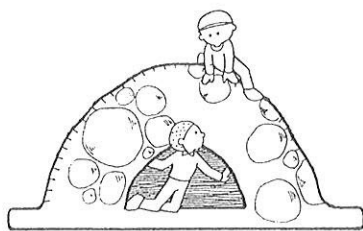
藤本 曜子

日曜日の午後は、みんなが心待ちにしていた、大きなトンネルに絵を描く作業です。

一年生の佳美は、素敵な色使いで大きなウサギと犬と猫を書き、最後まで本当によく頑張りました。隆は、馬、ゴリラ、サルなどたくさん動物、由花はかわいいリスを書きました。すらすらとパンダとねずみを描き、次の子のも手伝ってあげた詩美、個性的なライオン、豚を書いたリダーの信一。みんなで素敵な作品を仕上げる事が出来ました。

夏には、きつとこのグループで山登りにいきます。その時にはどんな顔が見られるのでしょうか。

子どもたちの成長においていかれないように、オトナも！と思う今日この頃です。



ひかりのこ

養護メモ 73

改正児童福祉法

菅原 哲男

子どもを育てるには、家族とりわけ親との協力が必要である。

特に、赤の他人がそれに代わって子どもを養育するのである。家族の協力なしにそれがよりよく達成されることは僥倖以外にない。

こんな確信を養護施設に足を踏み込んだその年に血肉にしてきた。

戦後の混乱期に「児童は時代の希望である」という理念を掲げて制定され、施行直後は街に溢れた浮浪児を狩り込み収容保護するという役割を担って始められた児童福祉法が、五〇年ぶりに改定され、四月より新たに施行された。

当初この改正の責任者たちは、その理念から関係法令に至るまでの抜本的な改正を志向したという。しかし、責任者ある人の言葉を借りると、養護施設などの業界にそれに対応できる、あるいはしようとする機運や体制にないことと、官の意識がそれを受け入れるほどの成熟に至っていないなどの理由が重なり、結局関係省庁とのすり合わせの必要なものや財政的裏付けの必要な具体的で実質

的な部分は、手つかずのままの部分改定に終わり、今後は駆伝方式で最終的な改正を目指すという言い方で落着いた。

今回の児童福祉法の改定によって、最も大きく変わったのは、これを養護し、あわせて「その自立を支援する」ことを目的としたことだと思ふ。たつた自立を支援すると言う単文が、法文の目的に加えられたことで、これまでとは関わる全てに位相そのものを変えさせる内容を含んでいるのである。

これは、戦後五〇数年にわたって一貫して続けられてきた「収容・保護」という社会的役割を終了させ、子どもの「自立支援」を目指すという内容の変更なのである。

「収容・保護」は、それが必要な子どもたちを施設等へ入所させることが特に行政機関の目的となりえた。しかし「自立支援」は、言葉にして言うほど易くはないだろう。

これまでも養護施設の現場では自立を目標にしてたゆまぬ努力をしてきている。何を今更の感なきにしてもあらずではある。しかし、今のこの

国のどこで誰が、自らの子どもであってもこれをよく自立へと養育していくことを容易にし得るだろうか、と思うのである。それこそが現実子どもを持つ親たちの共通の課題であり悩みでもあるのだ。もつといえ、これまで先延ばしされてきた、気の遠くなるような質量の国家的な困難な課題を担うことを予定されている子どもの問題は、そのような状況を負わせる現在のオトナの礼儀として、も国を挙げてこれらの子どもたちの、よりよい自立を力強く実現しなければならぬ課題なのだ。

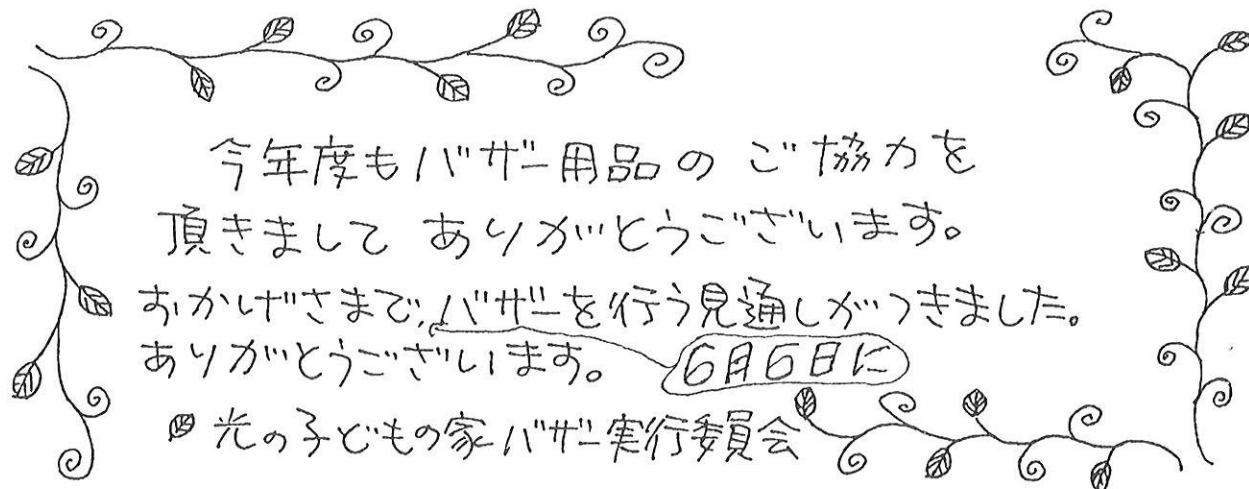
それにしても、ずいぶん長い間、五〇%そこそこを往き来している児童養護施設からの全日制高校進学率が示す現実を直視するならば、スムーズな社会的自立を実現することなど法が変わったというだけで簡単に出来るものだろうか。

自立支援という仕事のために、嘱託職員を配置しろと一施設あたり一九七万円余りも人件費が加算された。それも、これまで数年だけが続けたきた子ども家庭復帰促進事業を廃止し差し替えただけのものなのである。実質九七万円ばかりが上乗せされただけで職員一名を雇用できると本当に御上は考えるのだろうか。しかし、悪いことだけではない。

今年から子どもの自立のために親や家族と関わるのが児童養護施設の義務の一つとなったのだ。養護施設で子どもを育てるために、あらゆる意味で「自力」で、親や家族の協力を三〇年以上にわたり求め続けてきた者にとって慶賀すべきことである。特に、家族に関わることを義務づけられてきた児童相談所などから、ことあるごとに、「何を根拠にお前は家族に関わるのか、我々を信用しない違法行為だ」「越権行為だ」などと、白眼視され、ある時は糾弾さえもされてきたのだから。

さて、「養護施設が家族に関わることを罷りならん」としてきたものが、何の釈明も反省も謝罪もなく、「法が変わったから」という言い訳にもならない理由で「児童養護施設は家族に関わるべし」ということは、ご都合主義とでもいうのだろうか。

ともあれ、身の程を省みれば悪しきことを謀り、よこしまを友にしがちな者である。子どもたちの負っている社会的心理的精神的な負荷は、これに関わり三〇年を超えて時代が変わっても、この度また法が改まっても何一つ変化はしない。そんな、悲しいまでに固まって動かない彼らの状況を逃げないで共有する者に加えられていたい。



日誌抄 = 暮らしの風景 =

1998年 2月1日 ▶ 3月31日

2月

- 2日 県立高校推薦入学試験に萌季が挑む
- 4日 自分の担当だった子どもが光の子どもの家に入所した富士見乳児院の倉田、宇波各氏が原田家の佳美を訪問して遊んで下さる 数年間続いている継続的な関わり感謝
- 6日 継続的なご支援のベルアネックス(株)社長小山英子氏より食品を下さり 感謝
- 11日 郡山市より菅野圭樹博士来訪して子どもたちの暮らしと行動などをチェックして下さい 関わりへのご助言や診療の必要な子どもたちの診察を
 - 中三の将司 夜徘徊していて補導される
- 12日 昨夜の将司の件から中三の生活と内面についての洞察と関わりについて 反省と検討のための緊急職員会議 高校受験が忘れられたように集中できないまま旬日後にその日が迫ったこの日より 下校後から就寝までの生活を本家で共同でする合宿様の総動員体制をとって最後のとり組みを開始 以後真剣な取り組みと生活を楽しむなどのリズムが整う
- 14日 町内山崎Yショップの萩原靖子氏よりおいしいケーキをたくさんいただく 感謝
- 18日 町内北下新井の稲村節子氏より衣類を 感謝
- 23日 江森ヘヤーサロンより散髪ご奉仕を今月も 感謝

- 25日 県立高校入学試験 とり組みの遅れが著しい四名がさすがに緊張して挑んだ
- 27日 東京国際大学の村井美紀氏来訪 職員の現任訓練の実施について協議
- 3月
 - 2日 新年度へ向けた計画の個別自立支援計画の検討を開始
 - 5日 県立高校合格発表 合格祝とご苦労さん会の複数メニューで数日前からこの日に備えていたが 喜びの報告電話が相次ぎ 眠れなかったという担当者の目もうるみがち 何しろ始まって以来の4名という最多人数の合格者で 夕方から支援者や学習ボランティア 元職員などが駆けつけて合格祝を
 - 6日 日本生命春日部支社労働組合より池野支部長が来訪してお励ましをいただく
 - 9日 与野市岡安育子氏より衣類を 感謝
 - 12日 独自の事業への県単独の補助要綱初回のヒヤリング 展開してきたグループホームへの補助内定
 - 20日 古河市小野田正弘氏より日用品を 感謝
 - 22日 町内ボランティアグループ『ニコニコ体操クラブ』より日用品を 感謝
 - 28日 第52回理事会 98年度諸計画の承認
 - 30日 後援会役員会 反省と計画案作成など (くら)

/// /// ———— 反 射 光 ———— /// ///

☆改正された児童福祉法が実施された☆法が変わってもそれほど具体的な生活に影響はない☆それよりもますます暗く冷え込む景気状況が施設現場の財政を圧迫する☆毎年年末に地区を上げてお餅代を集めて下さる東婦人会を始めとする地元のご理解と歳末の寒風に身を曝し進学資金を浦和駅頭で呼びかけ続ける東大宮教会を中心の「光の子どもの家」を想う会」を始めとするキリストの教会に連なる同胞の祈りとお支えなしに必要な独自のとり組みは望めない☆改革や変革の声かまびすしいが社会福祉法人の普遍化を言いつつ国鉄の分割で得たうまみを二匹目の泥鰌よろしく福祉の世界に利潤追求の論理を導入しようとする者たちがいる☆今年度も退職者ゼロで安定した生活が継続する☆自立支援嘱託職員雇用費を元手に職人技の五木田供三に再度仲間に加わってもらった☆心して世紀末を乗り越え新しい世紀を切り開く子どもたちの「力」を養っていく決意を新たにしている☆をう
(哲)